広報
おおず
2021
8
No.199

「臥龍山荘庭園（がりゅうさんそうていえん）」が国指定の名勝になります

（特集）国指定名勝へ
臥龍山荘庭園の魅力に迫る

肱川河畔では、四季折々の美しい風景を眺めることができます。その中でも随一の景勝地と称えられているのが「臥龍山荘、臥龍の淵、蓬莱山」で構成される「臥龍」の景観です。

今回は、6月18日㈮に国の文化審議会が文部科学大臣に名勝指定の答申を行い、芸術および鑑賞上の価値、日本庭園史における学術上の価値も高く評価されている「臥龍山荘庭園」の魅力を紹介します。

この庭園は、新谷出身の貿易商河内寅次郎氏が明治後期に造営したものです。建物と庭園のある崖の上の平場は南北に長細く、北側に臥龍院、南側に懸け造りの不老庵などの建物（平成28年重要文化財に指定）が造られています。

臥龍院から不老庵までは、飛び石や延段の園路が続いています。不老庵の座敷からは、肱川が大きく方向を変えて淵をなし、眼下を流れゆく様子が見えます。蛇行する肱川の向こうには、冨士山、梁瀬山、亀山などが取り囲むように裾を重ねた景観が広がっています。

飛び石や延段には、輝緑岩や緑色片岩、げんだ石を中心に伽藍石（社寺の柱の礎石）や石臼を転用したもの、自然の摂理で模様の入った「てまり石」などが用いられ、庭園の奥へと誘っています。

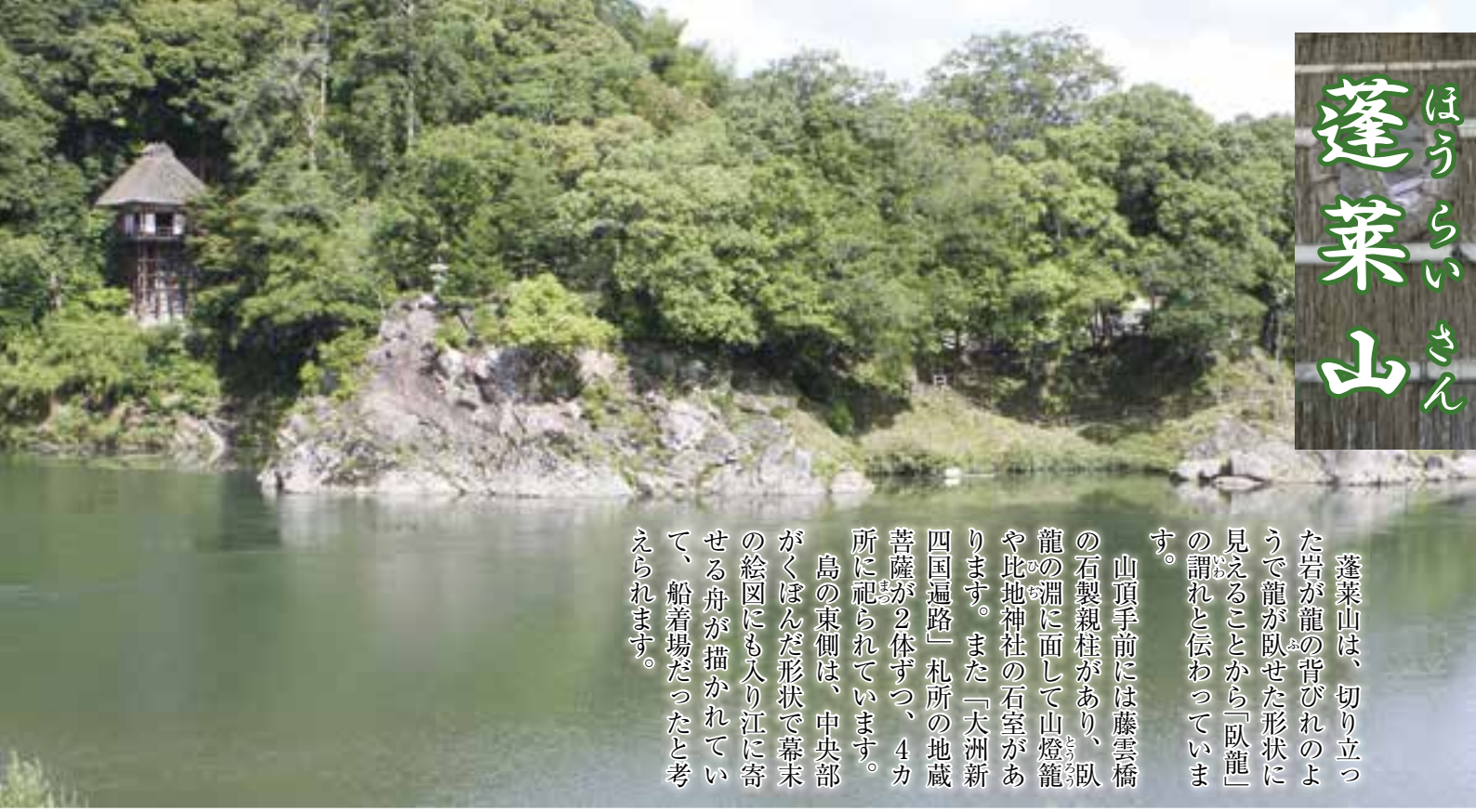
延段

臥龍山荘と蓬莱山との間に「藤雲橋」と呼ばれる橋が架けられていました。

現存する臥龍山荘側の親柱には、ワイヤーの残骸が確認されています。また、古写真でも架線状のものが写っているものが確認でき、ある時期に臥龍山荘と蓬莱山が架線状のものでつながっていたようです。昔の絵葉書や古写真では、樹々でつながっているように見えるものもあり、文字通り藤葛の絡む橋であった可能性が高いようです。

蓬莱山側の親柱

臥龍山荘側の親柱



蓬莱山（ほうらいさん）

蓬莱山は、切り立った岩が龍の背びれのようで龍が臥せた形状に見えることから「臥龍」の謂れと伝わっています。

山頂手前には藤雲橋の石製親柱があり、臥龍の淵に面して山燈籠や比地神社の石室があります。また「大洲新四国遍路」札所の地蔵菩薩が2体ずつ、4カ所に祀られています。

島の東側は、中央部がくぼんだ形状で幕末の絵図にも入り江に寄せる舟が描かれていて、船着場だったと考えられます。